聖 霊 会 次

総 第 本 Щ 四

協 舞楽参仕 天天 王王 寺 寺 楽 舞所 王 楽 雅 協亮 会 会

参集 十二時 進行 十二時半 (五智光院)

次 先 舞台がせん 道な 庭。 儀者 行き 壹越調音取 道楽 (左方右方) (舎利職次座)の両師は、舞台を渡り内陣の本座式衆は舞台上列立、一舎利(管長猊下)、二舎利東(左方)西(右方)に分れ正面より堂内に入る衆僧、楽人、長者等は五智光院東西濡縁を通り、

次 両り 舎利入堂 陣 本座に着

(しょうみょう 音階のあるお経)法会の開始を告げる聖徳太子を讃える声明に着席

次 惣 礼が 伽 陀 無附物

次 衆しゅ 僧 堂 内陣本座に着く

次 諸 役 別 デッタ 座 ざ

次 楽 舎 揚げ 幕 畧す

次 集り 会^え 乱らん 声 左右楽舎乱声

楽舞 振丸 楽 鉾 節 (左方右方) (右方)

> 舞楽目録参照 舞楽目録参照

三

次 次次 次

御

(右方)

御母 手な 水す

楽 廻盃楽 (右方)

次 次

両舎利登高座

次

鰄 誦 文も

次

楽行舞 願が 文もん

事 楽 承和楽 (左方)

次次次次

十天楽 (左方右方)

事

子楽薩鐘 迦陵頻 (左方) (左方)

次次次次次次次次

楽行舞獅舞菩行 伝系

鐘 楽 胡 蝶 (右方)

事

承和楽 (右方)

文もん

事 鐘 賀王恩

(左方)

次次次

楽行 祭は

匿る 始段唄

次

唄ばい

楽舞行 散為

華

事 楽 鐘

次次次次

延林喜

楽 歌

(右方)

次

梵ん

音のん

杖じ

次

錫き

心が呼び覚まされる

舞楽目 舞楽目録 録 蘇利古を参照

蘇利古を参照

一舎利 太子讃嘆の旨を唱え、 法華経四巻を読誦

舎利は西側、

二舎利は東側の高座に登る

二舎利 太子讃嘆の旨を述べ、 法華経四巻を読誦

舞楽目録参照

のご宝前に伝送 長者が祝詞を唱えるによりお供え物を内陣の楊枝御影・玉輿・楽を奏し、東西御供所から菩薩、八部衆の 鳳諸

舞楽目録参照 舞楽目録参照

盤に至る楽に乗り三綱は本座より舞台を渡り、

礼

三綱は、 太子に法会の目的を奏上する

礼盤に至る 衆僧は舞台に昇る楽に乗って先ず唄師は本座より舞台を渡り

舞台では衆僧が花びらを散らし諸仏を供養 唄師は礼盤にて始段唄 (声明) を唱える

する散華 (声明) を唱え、舞台を行道する

梵音(声明)、錫杖(声明)衆僧は本座より楽に乗り、舞楽目録参照 錫杖 (声明) 再び舞台に昇り を唱える

錫杖を鳴らし、 その響きによって人々の仏

が安楽を得る

仏のみ声 (梵音)

が、

十方に響き渡り

々

楽 長慶子 (左方右方) 両舎利は高座を降り、 両舎利降高座の楽を奏す 内陣の本座に着く

次次次次 舞一の舎利降高座 太平楽 (左方右方) 舞楽目録参照

入じ 舞 調 入調とは、これより 以降は鑑賞のための舞

次次次次 還於 挨舞舞 御業拶楽楽 執事長・法務部長 貴徳 (右方) 抜頭 (右方) 舞楽目録参照 舞楽目録参照

法会の終了

以 上

聖霊会(おしょうらい)

一体となった舞楽大法要で、四天王寺の最も重要かつ大規模な行事として、近年は四月二十二日に厳聖徳太子さまのご命日(旧暦二月二十二日)に、御霊をお慰めするために行われる、法要と舞楽が渾

が安置され、四箇法要(唄・散華・梵音・錫杖)と、舞楽が交互に織り成されてゆきます。 内陣の中央には楊枝御影(聖徳太子摂政像の御掛軸)、東側には 玉 輿(仏舎利)、西側には鳳輦(太子)内陣の中央には楊枝御影(聖徳太子摂政像の御掛軸)、東側には 玉 輿(仏舎利)、西側には鳳輦(太子)里徳太子千四百回忌の御忌に当る聖霊会をできうる限りの範囲で六時堂内、舞台、両高座、両楽舎等を聖徳太子千四百回忌の御忌に当る聖霊会をできうる限りの範囲で六時堂内、舞台、両高座、両楽舎等を率年は、コロナウィルス感染症拡大防止のため、五智光院に会場を移し厳修いたします。 修いたしております。

重要無形] 聖徳太子千 ·四 百 年 民 め 俗文化 应 伝 百回 忌 財

霊 会 目 録

総 本 山 四 天 王 寺

え W <u>Š</u>

寄 園 氣淵 惠和 秀夫

振 意味に を舞 もわ つれ たる 儀式 で的 あな る。舞曲 **『**教 歌が にっこう もとり よもと ば天 地 舞の 人神 はと 口祖 に先 次の の霊

よう

なり

鎮を

ら以人 詞捧 詞を 「天唱 報楽の いよっの長え舞の 度舞うことを「振 一人ずつ出て、鉾 が和世理、国家太 舞う。 歩る宗教的な意味 かる宗教的な意味 ()舞を上 ()舞とが () 節同下雅 時左右成 ん舞に就 ぶ台打 さにち ん登振 せりつ せつ)」とり舞う。これのて舞う。 ے ع いれま いたながたこと 四合方 天鉾の 王寺あり でわが はせ舞 は今もなおい舞う。次になっ 厳と右 重に 2 方の 舞

蘇 利 古 (そり

田光 典 信証 昭 寄 氣 惠 秀 今 丸 川野 司 宏 文 昭

神 吉

(みちょうず)」の秘儀が行われる。 (本ちょうず)」の秘儀が行われる。 (本語、子御影の帳(とばり)を上げる「御上帳(進行上、省くことのできない舞楽である。このこの舞は一般的には四人舞だが、五人で舞うのこの舞は一般的には四人舞だが、五人で舞うのこの新目覚めを慰めるための供養舞である。 石方平舞(へいぶ)装束の諸肩袒(もろかたった方の舞である。 百済からの帰化人である須 帳(みじょうちょう)」の儀式とほこのあと六時堂内では宮殿(くう伝えられており、聖霊会舞楽大法うのは四天王寺独特である。徴である。手に持っている棒を「徴である。手に持っている棒を「かたぬぎ)の姿で、長方形の布にる須々許理(すすこり)という人 こ に 人が 楚面 \mathcal{O} で抽の あ象舞

と、うで、 御水を: 女の最初 捧安の

英織

承

を命戸新 祖(おおおお) (ぬ) を 上舞 安 和 (ぬ) た 作 も 代 ぎ、曲、 、調子で出て当曲に舞い曲は唐楽、壱越調(いちし、三嶋武蔵が舞を作りれた。この楽曲もその一八世紀末) になると、(しょうわらく) をといると の時代 一。しょうぞく)しょうぞく)とって「承和」の時、勅に上出の時、勅に上出の時、財に上出の時、財に上げたなり日 本で で右で右 \mathcal{O} 肩と大

迦 か 1)

平 野 倉橋 豊幸 楽 多田亮円 吉光 蓮

浄に舞 来典がこ 土桜楽いのに飛の天 注厳を見る思いがする。 注厳を見る思いがする。 注厳を見る思いがする。 注厳を見る思いがする。 注して、世により伝えられ には、インドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ が記して、単(さえず)り舞う姿を妙音天女が舞い。 でいたがでいた。 には、インドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ はでが発して、世ばしばその名が出 が記述をがから、 でいたがのでいた。 ではしばその名が出 が記述をがきまる。 とともに童舞(わら ではしばその名が出 が記述をがきまる。 といて、とばしばその名が出 が記述をがきまる。 といて、といる。 には、インドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ はい、インドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ はい、インドの祇園精舎(ぎおんしょうじゃ 荘花あれ音極しに八 をつくって舞台上を飛びわらべまい)で、背に鳥が出てくる。が出てくる。が出てくる。が出てくる。がはてくる。がはてくる。がはてくる。がはてくる。がはてくる。がはてくる。がはない。世養の日に迎陵頻び、大きない。 平者頻ん 安時代に伝えた。 このと と お り よ が が 国 うび の伝んの 文説が一つ にあと には、 という という (きない (きない 天仏鳥

が鳥の まわる姿は、軽快可憐、ナの羽をつけ、天冠(てんが)」とともに欠くことのでキ

菩 Œ z 2

拿 引 寄蓮氣 沼 惠善 秀行

しのい と舞舞っ 称は楽の し失の曲 て、一伝されて、一 二れと皆 一人でなが のいご伝 の菩薩が舞台といた。それ以及にたるとれたとれたとい れ以降、ことから、ことから、ことから、ことから、ことから、これがある。 上を、壱ヶ 三世調の一世書のと考りと考り 回交錯して回る時の「菩薩」の口は舞われている 回るだけの作法となっている」の曲を演奏し、その間に「ていたことは確かであるが、いる。古記録によれば聖霊会 る。
で大輪点で大輪点で大輪点で大輪点で大輪点で大輪点では、 #小輪(おり時代にはりは欠くこと おする わこっでにる わそな

î

北地 墨林 昭龍 亮 二本松 土庫 光陽 真澄

い伝だわ現ど舞百済 れ龍のはのとの れている。ゆるやか 間笛の演奏に、三人 の先駆をし、四天 いた駆をし、四天 とり入れられて広く とり入れられて広く (人) なんし、がなた。 深のと菩伝獅た いつも産る 響づ近と 響づ近と Wach con Water Appendix Tall 録にもたった。 大鼓を加えて 大鼓を加えて 大鼓を加えて 大鼓を加えて 大数を加えて 秘曲は、龍笛の特徴をフルに生かえて演奏される「獅子」の曲は、今もとづき四方拝の所作を取り入れ輪を描いて歩くだけの「大輪小輪」の秘曲に合わせて、舞台上で舞といえる。四天王寺では儀式の行考えられており、後世三味線音楽 か今れ輪舞行楽 たった たおいお。 へ歌 といる。 しだまれる といる おおもり できました おおもり かんしん (おおわかる) とくたこしう

5 ょ Ž

胡

倉橋 幸 楽

日

彦

亚 野 豊

舞れ時童のて わてに舞一咀舞れい作で曲嚼楽 れている。

「なっという。またである。楽書によれば
田である。楽書によれば
田である。楽書によれば は、「**逆**陵」 「<u>迦</u>陵頻」 「<u>迦</u>陵頻」 の原○つさも 舞舞皇しば平 舞は、高麗 に、高麗 は、高麗 統親撲れ楽に にがって今でまなって作舞されまがく)の形式を中ただ二曲の深ずもう)ないではありまれる。 本の音楽! 一をご覧 をご覧 をご覧 にもになら舞 よ伝な美れ競 つえっしたと てらたい中し

多 淵 治 見 眞 和 篤 夫 巖 多 水 田 真 円 光

後、このれが用いる。このである。 には、この曲に EHにこの舞び と 記」(おいな で 記」(おいな で 記」(おいな で にこの舞び で る。「臨河」 にれ楽ね様別. 特各との計画を 然外にメのすと な打楽器の奏法とともに、軽妙な人が足を立ててゆっくりと前進いう伝承などを思い起こさせる。メロディーと同じであるとの言いメロディーと同じであるとの言いのメロディーが、雅楽の声楽曲いのという。この筒袖、ずん胴の袍にはもことも記される。袍(ほう)は、ことも記される。袍(ほう)は、 伝えや、古 のる「催馬 (かぶと) 古馬銀

作出 が手 なを さ行

平 楽 た 11 \sim V ら 新 丸 川 \mathbb{H} 恵司文

太

曾 村根 上 智仁

約線りであ 時や肩る 間な喰こ 同を要する。曲はなぐい)を背負い、ほ(かたくい)。 はい・か 序、脛め デー・破・1 手に鉾 しい装 ・急に分かれ、三野をもった勇壮なり、・籠毛を見ただけで 三な手で 一つの曲になってわかる。 こ を 置 に よっ 四 に よっ 四 に よっ 四 付 で て人けある 成舞太挂

田(けいこう)をつけ、兜をかぶり、甲(けいこう)をつけ、兜をかぶり、甲(けいこう)をつけ、兜をかぶり、中(けいこう)をつけ、兜をかぶり、甲(けいこう)をつけ終るためには約一人の装束を全部つけ終るためには約一を高、魚袋には弓が無く、胡籐の矢が逆た。魚袋には弓が無く、胡籐の矢が逆た。魚袋には弓が無く、胡籐の矢が逆た。魚袋には弓が無く、胡籐の矢が逆いる。この曲の急で、舞人が太刀をでいる。すなわち、太平楽の演奏がなけいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏される頃にいるが、「太平楽」が演奏が表した。 大っているのは、 工は破邪顕正の剣で空かんぎょ)の舞楽大法理 聖霊会の儀式が終 聖霊会の儀式が終 でいるのは、 野霊会の儀式が終 でいるのは、 をいるのは、 をいるのもの。 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのは、 をいるのと。 をいる。 をいる。 をいる。 をいる。 をいるのと。 をいる。 を、 残を今もなおそのままに伝援を今もなおそのままに伝えが、延々と奉納されていたれる。これは、古来のしきた法要に省くことのできなは、天下の太平を寿ぐ意味剣で宗教的平和を讃える曲が、延々と奉納されていた。 れて霊て内っこきと

信昭とは、 り法 法 要 楽に識 入り へると のれ 意味 で養 あ舞 るが 終

ぼ

エくもい ドかう。 ウの 一説林 のが邑 こ伝僧 とえ仏 で、いたられ 曲て伝 はいえ そるた \mathcal{O} 王最林 の近邑 名の八 馬研楽」 毒での 蛇は一 を「つ 役しまります。 殺抜で、 様をと 表イ持 現していって て神力

ちに無人は た、う)」」」 た、う)」」」 た、う)」」」 た、う)」」」 た、カルスので・ボスので・ボスので・ボスので・ボスので・ボスので・ボスので・ボスのでは、 す人笛鼓方舞てダう・ ・鉢頭・髪頭とより。この曲はいっかにでてくる王 クにでてくる王 り。この曲はいっかの楽舎が演奏を かは演奏がであるが、四五 かによって創られている。 祖入にる。 特場登。で 特場では、 五拍子の楽 でリッでリッでリッでリックでリックでリックである。 がある。かある。かある。 ルに この この で表すわ さ拍舞味 曲ら楽灯聖 の演者を書会 優奏を繰り返せらうし)」といった先導に道いた先導に道いる。 すいん導の うつじか楽

貴 (きとく) 野 真 龍

うし)」のリズル徳破」で舞い始めないう。眼光的なとともに、気品のという。眼光的などをある。たともに、気品のととのでから、で舞人がなる。で舞人がなる。で舞りの下ででから、でからいののでは、でからいののでは、でからいののでは、でからいののでは、でからいのでは、でがらいのでは、でがりのでは、でがらいのでは、でがりのでは、でがりのでは、でが 舞われ、最後は「急」の楽壮に打ち振って「破」を舞音取(こねとり)が奏されている。曲はまず笛のはな面をつけ、番子(ばんななのがある。番舞(つ猛な面をうど)にいたが、この下地方)から伝えられた右方地方)から伝えられた右方地方)から伝えられた右方 の楽曲にのって威風堂々の様で退場する。 を舞いおさめた後、再び軽快な「唐拍子(からびょくされた後高麗壱越調(こまいちこつちょう)の「貴々(つがいまい)である左方の「散手」(さんじゅ)がはんこ)を従えて、するどく鉾を打ちすえる舞振り(ばんこ)を従えて、するどく鉾を打ちすえる舞振り(ばんこ)を従えて、するどく鉾を打ちすえる舞振り(ばんこ)を従えて、するどく鉾を打ちすえる舞振り(だん方の曲である。その昔、漢の帝王に降服して帰徳に右方の曲である。その昔、漢の帝王に降服して帰徳

聖

霊会

差

定

音 杖

梵錫唄三二一

綱 舎 舎

役利利

南瀧勝中一靜奥施真吉 鬘 之 音 專 之 行 光 祥 猊

嗣教院院院院院院院院 (鈸) (鐃)

華

兼荒西小磯中松佐柏地東子木山嶋部西井木原 鐵興純光雅廣孝教智 秀徳敬英哉道瑞真覚院院 所(右方、一舎利先導) 原(左方、二舎利先導) 原(左方、二舎利先導) 原(三綱) 垣(忽礼) 垣(忽礼) 垣(忽礼) 垣(忽礼) 垣(忽礼) 一舎利) 一舎利)

承従従承引承引引引行奉

仕僧僧仕頭仕頭頭頭事行

숲 숲

伽

陀

以

上

聖霊会舞樂大法要 参仕伶人

舞 人

振 鉾 定 園淵 和夫 (右) 寄氣 惠秀

蘇利古 神 田 典 証 吉 光 信 昭 丸 川 司文 今 野 宏昭 寄 氣 惠秀

承 和 楽 寺 西 覚 水 曾根 暢貴 鷲 慧 奥田 英織

迦 陵 頻

倉橋

楽

平 野

豊 幸

多 田

亮円

吉光

蓮

菩 薩 (手引) (左) 蓮沼 善行 右 寄 氣 惠 秀

子

土庫

光 陽

二本松真澄

北 地

昭龍

墨 林

亮

胡 蝶 倉橋 楽 平 野 豊 幸 日下 采彦

太平楽 新發田恵司 丸 川 司文 曾根 暢貴 村 上 智仁

林

歌

園淵

和夫

多治見眞篤

多田

真円

巖 水

法光

抜 頭 吉 光 信 昭

貴 小 野 真龍

聖霊会舞樂大法要 左右管方表

樂 行 事 (左) 蓮沼 善行 右 味 府 浩子 寄氣 惠秀

樂行事補 定 北中 廣興 右 藤原 淑子

説 藤原 憲 裏 方 倉橋 陽 子 平野みゆき 吉光真絵

左方管方

鞨 鼓 小 野 真龍 太 鼓 巖水 法光 鉦鼓(道行のみ)曾根 暢貴

覚 水 塩 田 隆志

寺 西

鳳 笙 新發田恵司 植木明佳理 井 上 幸 子 塩 田 隆志 堀辻喜久子

佐 竹 依子 今 野 宏昭 山内 望 邑上 紀子

篳 篥 髙木 了慧 吉本 乘亮 北 中 廣興 眞藤 眞 松本みゆき

中 浩史 藤井 雅 峰 和田 敦 子 エルリッヒ 墨 林 亮

龍 笛 東 野 藤子 勘田 紅美 安藤 益子 藤 康 隆 新山 容子

慧 奥田 英織 川端 晃 正 小 野 碩

鷲

三之鼓 笙 前 川 味 府 林 浩 子 隆 哲 絹代 楠 太 行 正 鼓 神 田 多治見眞篤 土庫 典証 光陽 鉦鼓 (道行のみ) 和田 敦子 小野さつき 二本松真澄

鳯

明 山

晃大

篳 篥 前 川 隆 哲 多 田 真円 竹 村 隆 道 薗 知 彰 桑 田 和貴

関 伊知郎 藤井 悠熙 北 地 昭龍 前川 隆 信

龍 笛 • 髙木 宏子 中原 詳人 坂 井 潤 子 苷 蔗 寂泉 青野 賢次

松下 由紀 高麗笛

白井

周 作

山 本

恵子

見澤

晃憲

石 原

政洋

小 島

緩実

(何れも順不同)

天王寺楽所 雅亮会